

平成二十九年 入学選考試験 国語 「特待生入試」

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① ことばというものは、その性質上、事実をそのまま伝えることは出来ない。その意味では実に不完全、不十分なものである。したがって事実のレベルでの理解が可能な場合には、不十分なことばで理解を上塗りする必要がないのみならず、なまじ不完全なことばを使うことは、折角合一的な理解が出来ているものに、水をさす結果にならないとも限らない。何も言わないのが一番びつたりするのである。日本人の伝統的な伝達が、理解よりも察知すること、説得よりも感得することに重点が置かれていたのは、結局は同質の相手を前提とし、相手と同質になることに努め、またそれが可能であったという事実には帰着すると思われる。

② 日本では古来ありとあらゆる学問、学芸が行われて来たにもかかわらず、ことばの使い方をレンマ修業する雄弁術や修辞学だけは、遂に発達せず、今なおえり見られないという事実は、私たち日本人のこの根強いことば不信の伝統の故であろう。事実が優先し、そして事実に頼れる社会では、△ことばという本質的には虚構性の濃厚な伝達手段の出る幕がないのだ。

③ 人種、宗教、言語、風俗習慣、生活様式のすべてが基本的に異なり、時には対蹠的たしよとも言えるほどの対立さえ見せるユーラシア大陸の諸民族にとって、事実理解の面での相互の一致は望めないのである。だからと言って相手を無視して生きて行くことも出来ず、また相手を力で△アップクさせることも常に可能とは限らない。基本的な不一致、重大な前提の違いを踏まえながら、せめてもの妥協をはかる必要が生じてくる。異質の相手と自己との間に横たわるこの相違を乗り越え、相互の距離を少しでも縮める唯一の手段として、ことばによる説得、ことばによる自己主張がここに登場してくるのである。

④ 彼等も日本人と同様、ことばが本来的には不完全であり、時としては無力に近いことを知らないわけではない。しかし無力であり不完全であると知りながらも、それに頼る以外に相互理解の方法がないという追いつめられた、ぎりぎりの状況から、逆にことばを重視し、ことばによる伝達に全力を注ぐという一見ことばに対する信頼とも見える△ムジュン的な態度が生まれてくるのだ。

⑤ ギリシヤ、ローマ以来の西欧社会、中国、インドの歴史を見れば、人々がいかにことばを使い、ことばを磨き、ことばで結ばれた契約に△コシツして来たかが一目△リョウウセンである。

⑥ 裁判、政治、教育、外交のすべてが、ことばとことばの烈はげしいぶつけ合いの様相を呈していると言っても言い過ぎではない。

⑦ △ことばに表わされないものは、存在しないに等しいとすら言えるほどの、このことばに対する情熱は、大切なこと、重大なことほどことばでは言えないと考える私たちの心情とはほど遠いものである。

⑧ 私たちはしばしば議論をする時、相手の主張に対して、《それは理屈だ》といって反対する。《理屈はそうだが、事実かどうか》といって賛成をひかえることもある。私たちは明らかに事実を理屈にまさるものと考えているのである。《論より証拠》なのである。ところが、西欧社会ではしばしば《証拠より論》という態度が見られるのだ。これは、万人にとって承服出来る客観的な事実の存在を前提とすることが出来ない、異質の構成員よりなる社会集団が彼等の社会なのだということを考えて、初めて理解出来るものである。

問一 波線部㊦㊧のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部㊨のようにいえる理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ことばは便宜的に作り上げた記号であるから普遍性はない。
- イ ことばは事物や事実を追随するもので本来能動性に乏しい。
- ウ ことばは無形なので事物や事実の示唆以上の働きはない。
- エ ことばは必ずしも事物や客観的事実には合致していない。

問三 傍線部㊩の理由として考えられることを述べなさい。

問四 段落①で、ことばをどのようなものにとらえているか、三十字以内で答えなさい。

問五 段落①で、「日本人の伝統的な伝達」はどのようなことを前提にしていると述べているか、十字以内で答えなさい。

問六 段落②で、日本人の伝達はどのような特徴を持っていると述べているか、二十字以内で答えなさい。

問七 段落③で、ユーラシア大陸の諸民族にとって何が重要なものになっていると述べているか、二十字以内で答えなさい。

問八 段落④～⑦で、ユーラシア大陸の諸民族の「ことばに対する情熱は私たちの心情とはほど遠い」と述べているが、その諸民族がその情熱を持つ理由は何か、段落⑧から三十字以内で抜き出して答えなさい。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 に 答 え な さ い 。

大導寺信輔の生まれたのは本所の回向院えこういんの近所だった。彼の記憶に残っているものに美しい町は一つもなかった。美しい家も一つもなかった。殊に彼の家のまわりは駄菓子屋だかしやだけの古道具屋こどうぐいだけのばかりだった。それらの家々に面した道も泥濘ぬかひらの絶えたことはなかった。

信輔はもの心を覚えてから、絶えず本所の町々を愛した。並み木もない本所の町々はいつも⑦スナボコりにまみれていた。が、幼い信輔に A を教えたのはやはり本所の町々だった。彼はごみごみした往来に駄菓子を食べって育った少年だった。田舎は―殊に水田の多い、本所の東に開いた田舎はこういう育ち方をした彼に少しも興味を与えなかった。それは自然の美しさよりも、⑧ムシろ自然の醜さを目のあたりに見せるばかりだった。けれども本所の町々はたとい自然には乏しかったにもせよ、花をつけた屋根の草や水たまりに映った春の雲に何かいじらしい美しさを示した。⑨モツトも自然の美しさに次第に彼の目を開かせたものは本所の町々には限らなかった。本も―彼の小学時代に何度も熱心に読み返した蘆花の「自然と人生」も勿論彼を⑩ケイハツした。しかし彼の自然を見る目に最も影響を与えたのは確かに本所の町々だった。家々も樹木も往来も妙に見すばらしい町々だった。

実際彼の自然を見る目に最も影響を与えたのは見すばらしい本所の町々だった。彼は後年本州の国々へ時々短い旅行をした。が、荒あらしい木曾の自然は常に彼を B にした。又優しい瀬戸内の自然も常に彼を C にした。彼はそれらの自然よりも遙かに⑪見すばらしい自然を愛した。殊に人工の文明の中にかすかに息づいている自然を愛した。三十年前の本所は割り下水の柳を、回向院の広場を、お竹倉の雑木林を、―こういう自然の美しさをまだ至る所に残っていた。彼は彼の友だちのように日光や鎌倉へ行かれなかった。けれども毎朝父と一しよに彼の家の近所へ散歩に行っていた。それは当時の信輔には確かに大きい幸福だった。しかし又彼の友だちの前に⑫トクトクと話して聞かせるには何か

D 幸福だった。(一部省略)

